

どうみる？ 多疾患併存 マルチモビディティへの アプローチ

現代の医療現場において、複数の疾患をあわせもつマルチモビディティ(多疾患併存)は、もはや例外的な病態ではなく、日常診療の中核に位置する課題となっている。多くの医療従事者が実感しているように、このような患者に対して、個々の疾患別ガイドラインを機械的に積み重ねるだけでは、必ずしも望ましい転帰には結びつかない。狭義の医学的介入のみでは応じきれない局面が少なくなく、患者の生活背景や価値観をふまえた総合的な視座が、強く求められている。臨床の現場では、迷いと逡巡を抱えつつ、最適解を模索する営みが続いているのではないだろうか。

マルチモビディティに対して、現時点で決定的な方法論は存在しない。むしろ、その本質は、画一的なアプローチが原理的に成り立たない点にあるといえよう。だからこそ、個別の問題に拙速に対処するのではなく、一步退いて全体像を俯瞰する視点が重要となる。5Ms アプローチや頻出する疾患パターンは、複雑に絡み合う病態を整理し、その構造を読み解くための有力な手がかりとなる。その過程において、心不全、慢性疼痛、糖尿病、あるいはポリファーマシーといった、全体を複雑化させている介入の鍵が浮かび上がり、診療の見通しが開けることも少くない。

介入の成否を最終的に左右するのは、患者の個別性にいかに向き合うかという点にほかならない。そのためには、多職種の視点を結集しつつ、患者自身の価値観や人生の文脈をていねいに汲み取り、医療者と患者とがともに納得し得る落としどころを創り上げていく姿勢が求められる。

一筋縄では捉えきれないマルチモビディティという課題に対し、本特集では多面的な視点からアプローチを提示した。本号が、混沌とした臨床の只中であって、より見通しのよい診療を実践するための、確かな指針の一助となれば幸いである。

関西医科大学総合診療医学講座(地域医療学)

石丸裕康